

— Report —

在宅医療の充実に向けて —地域医療での薬剤師の新たな役割を考える—

当麻成人^{*}, 林哲也, 西野隆雄, 銭田晃一, 東剛志, 藤森功, 戸塚裕一, 松村人志,
阪本恭子, 山沖留美, 芝野真喜雄, 佐藤健太郎, 小森勝也, 藤田芳一

A Novel Role of Pharmacist to Improve the Home Medical Treatment in the Community Health Care

Narihito TAIMA, Tetsuya HAYASHI, Takao NISHINO, Koichi, Zenita, Takashi AZUMA, Ko FUJIMORI,
Yuichi TOZUKA, Hitoshi MATSUMURA, Kyoko SAKAMOTO, Rumi YAMAOKI, Makio SHIBANO,
Kentaro SATO, Katsuya KOMORI, And Yoshikazu FUJITA

Osaka University of Pharmaceutical Sciences, 4-20-1, Nasahara, Osaka 569-1094, Japan

Japan has serious problems with the declining birth rate and aging population, and the number of patients who receive medical treatment at home is increasing. In this situation, much is expected to pharmacists as a member of medical team to provide high quality care with accuracy, pharmaceutical education, and patients' satisfaction in the community health care system. Hereinafter we propose a novel and meaningful role of pharmacist in the community health care in order to improve the home medical treatment from a viewpoint of the efficacy of physical exercise at home.

Key words — medical treatment, pharmacist, community health care, exercise at home

はじめに

今後ますます少子高齢化が進むなか、在宅医療の進展は地域医療の重要な課題となっています。地域の在宅医療活動において、薬剤師は、病気や障害を持つ人が住み慣れた生活の場を訪問し、主治医の指示のもとで、適切なケアを通して療養生活の支援を行う事が求められつつあります。つまり、在宅医療を受ける人の望むことを手伝い受療者の活力・活動を取り戻す事、QOL向上、介護者の負担軽減、そして新たな障害の予防を図る事が、リハビリを含む在宅医療の大きな目的として考えられます。今後薬剤師が「薬局での調剤、投薬、服薬指導」以外に、介護を必要としている人たちのもとに赴き、健康指導および栄養指導を行う事が、これからの医療に必要なとなるの

ではないかと考えます。(以下は、看護師など医療に携わる方たちと懇談し得られた情報をもとに提案したものです。)

薬剤師の従来の役割と新たな役割を考える

患者の状況に応じて薬剤師としての対応も限定的なものになると思います。在宅患者の主病は「脳血管疾患」、「認知症」、「高血圧性疾患」「虚血性心疾患」「悪性腫瘍」、「糖尿病」など生活習慣に起因する疾病が主であります。その中で、在宅患者には脳血管疾患患者が最も多いという報告があります。これらの傷病をもつ在宅患者に対して、薬剤師として従来どのような役割を果たしてきたか、以下にまとめます。また考えられる課題および今後の取り組みについても記します。

^{*} 大阪薬科大学総合科学系環境医療学グループ, e-mail: taima@gly.oups.ac.jp
本稿は学術交流推進ワーキンググループ主催の学術活動の一環として当麻が代表してまとめたものです。

一在宅医療における薬剤師の役割・課題・取り組み

【従来の役割】

- ①処方箋に基づき患者の状態に応じた調剤
- ②患者宅への医薬品・衛生材料の供給
- ③薬歴管理
- ④服薬説明
- ⑤服薬状況と保管状況の確認
- ⑥残薬の管理・麻薬の服薬管理と廃棄
- ⑦ケアマネージャー等の医療福祉関係者との連携・情報共有
- ⑧医療福祉関係者への薬剤に関する教育

このように、在宅患者およびその介護者への最適かつ効率的で安全・安心な薬物医療の提供などが役割として期待されています。

【課題】

高齢者が多い在宅医療における課題として①加齢による合併症とそれに伴う多剤併用の傾向にある重複投薬相互作用のリスクの増大。②視覚・嚥下能力など身体機能の低下に起因する服薬管理の服薬方法の適切な支援。③腎・肝機能の低下や体成分組成の変化に伴う体内薬物動態の変動や個々人の生理機能に応じた処方・調剤・服薬の管理などが大きな課題としてあげられます。

【取り組み】

今後の取り組みとしては、他職種との連携をさらに強化する事が望まれます。

- ①薬剤師と看護師間…医薬品情報の提供，薬剤訪問指導内容の共有，重篤副作用の説明，副作用チェックポイントの説明
- ②看護師から薬剤師…訪問時の副作用のチェック，症状変化時の報告，薬の影響についての相談
- ③薬剤師と介護職との連携…介護職訪問時の服薬介助，スケジュール調整依頼，介護職訪問時の体調チェックの依頼，薬剤訪問指導内容の共有，入院時における服薬情報の提供
- ④介護職から薬剤師…ケアプランの情報共有，利用者情報の提供，介護保険に係る情報提供，生活，経済状況等の背景等の情報を共有しながら，お互いより良い在宅医療となるように密接な連携を取る。

○薬剤師のさらなる取り組みとして

他職種との連携において、特に介護師や理学療法士が行うようなマッサージやリハビリのための運動・スポーツなどは、薬剤師も注意事項を守り要点を抑えることでより効率の良い在宅医療を提供できると考えられます。運動については、医療現場において好影響を与えるとする報告が多くあります。端的に以下に述べます。

人間にとって運動が必要なのはいつの時代も変わりません。しかし、昔なら病気の人は運動をしないほうがよいのが常識でありました。最近では、前に記した社会問題となっている生活習慣に關係した疾病については、適度に体を動かすことで予防できることがわかっています。また運動によって生活の質を向上させたり、日常身体活動の維持につながったりする運動の効果も明らかになっています。運動が疾病予防、改善に効果的な理由の一つに、疫学的な観点で身体活動量の多い人、特に有酸素運動を実施している人が、心臓血管疾患の発生数が少ないという報告があります。三大疾病の一つである心臓血管疾患のリスクファクターとして糖尿病や高脂血症がありますが、これらの疾患は、エネルギーの出納バランスが崩れることで生じ、運動により改善できるという報告もあります。内科的疾患に限らず、最近注目されているロコモティブ・シンドローム（高齢者の骨や関節運動器疾患）が介護予防を妨げています。介護の分野においても、運動には重要な役割があり、高齢化が進んだ現在は、高齢者を介護する人も高齢化しているため、介護される人の身体活動が活発になれば、介護する人は楽になります。介護される側にとっても、動けるほうがいいことはいまでもありません。さらに精神面でも運動の効果は認められつつあります。うつ病などの精神疾患の治療では、すでに運動療法が取り入れられています。もっと単純なところでは、気晴らしやストレス解消、リラクゼーション効果などもあります。運動によって脳内でセロトニンやドーパミンが放出され、精神的に好影響が現れることも報告があります。少子高齢化による人口構造の変化に加え、疾患構造の変化、とりわけ生活習慣病と呼ばれる疾

患がクローズアップされるようになったことで、体を動かすことの重要性があらためて注目されてきました。特に、患者数の多い病気の改善に運動が大きく関与していることから、その重要性に着目することは当然の事だろうと思います。今後薬剤師においても、運動の必要性を理解し、患者やその介護者に運動をすすめられるように取り組む必要があると考えられます。

おわりに

在宅医療における薬剤師の役割・課題・取り組みを踏まえ、運動による心身の効用について理解し、健康のための栄養の知識も柔軟に取り入れて在宅医療に携わる事は、薬剤師としての活動場面

を広げることに繋がると考えられます。医師たちは、在宅医療を日常的な外来診療の延長線上にあるものと考えており、厚生労働省や日本医師会も数年前から取り組みを促してきたところではありますが、これまでのところ十分な成果が上がりません。在宅療養者に対応するには様々な困難はありますが、まずは医療従事者としての薬剤師が、本稿で述べたような新たな役割も含めて、チーム医療の一環としてできることを積極的に取り組み、その輪を広げていくことが重要であると考えられます。

参考文献

日本医師会雑誌第2013. 142巻・第7号